

特47-649

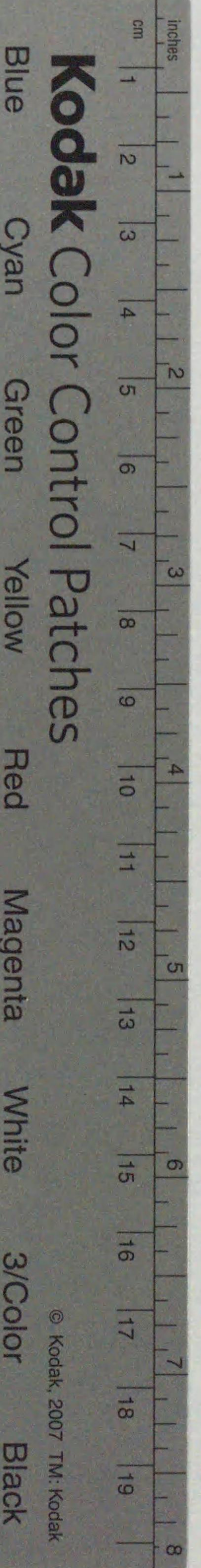


1200500896356

特47
649

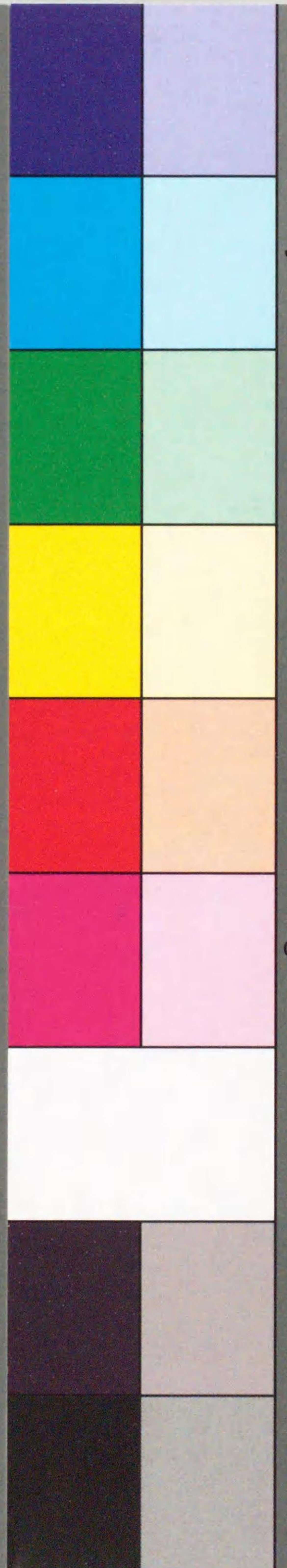
女子教鑑

国立国会図書館



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



25

女子教鑑

女子教育

函	第
架	第
號	第



224
387

母のおもひ

(一) はらのおもひは空にみち、ゆくへもしらぬ、はておなじ、つきの柱を、た

をりてぞ家の風をば、ふかせつる、あふけく母のみいさを

(二) 母のなさけの撫子よ、露あわすれを、めぐみをは、家はうつすもそたて草

機をさるさへ教へくさ、したへく母のなさけを

才女

(一) かきながせる、筆のあやに、そめしむらさき、世々あせぬ、ゆかりのいろ、
ことほのはな、たぐひもあらじ、そのいさを

(二) まきあけたる小簾のひまに、君のこころも、しら雪や、廬山の峰、遺愛の
かね、めにもることき、その風情

治御代



(一) 治る御代の春の空、たゞよふ雲もはれにけり、晴るゝみそらの、その雲は
めぐみの風に、はるゝあり

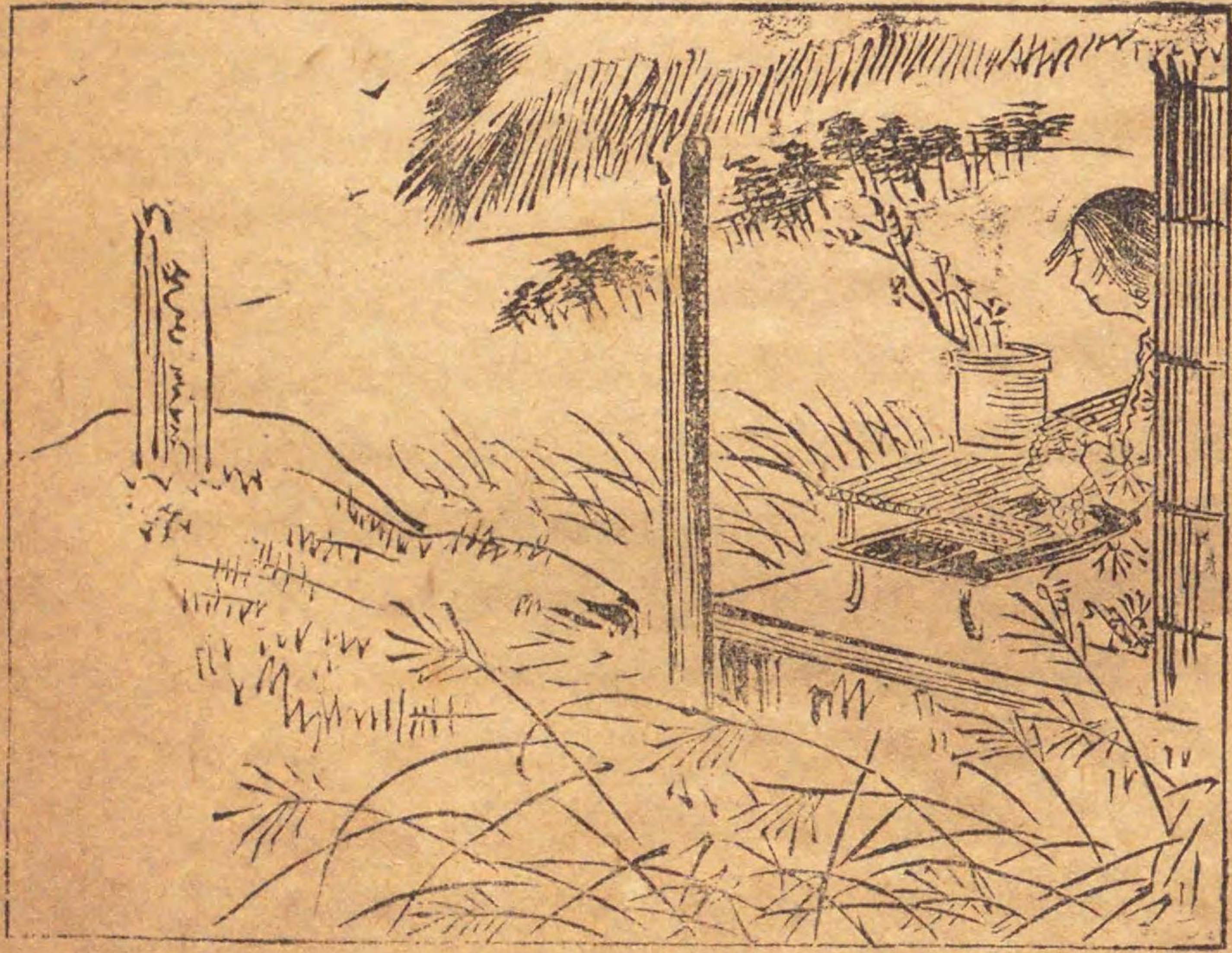
(二) 治るみよの春の風、千里の外にみてるなり、みてるめぐみの風にこそ、青
人草はさかゆらめ

修身 女子教鑑

橘逸勢の女至孝

人の行ひは孝行が第一にて古語にも孝は
百行の本衆善の始めといつてあります昔
し能書の聞は高き橘逸勢といふ人があり
ましたがその娘は實に親孝行にて父が罪
を得て遠國へ流されたとき悲み働き踝足
にてその跡につき従つて行きましたから
護送の役人が之れを謹めて立ち去らせま
したけれどもその娘は晝は野山に伏し夜

育英散史著

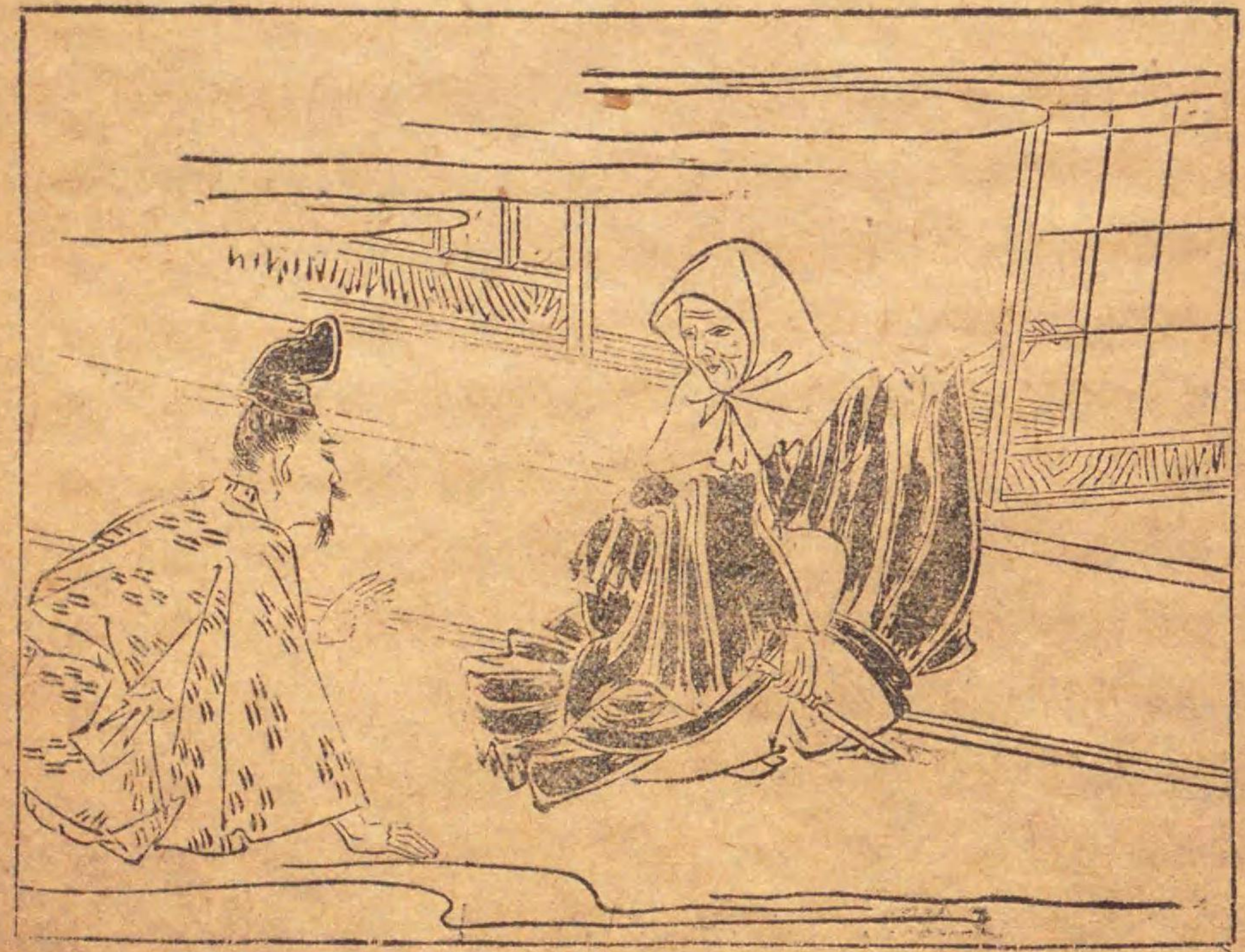


は父の跡を追ひ行き遂に離れませんでした逸勢は配所にて死去いたしました
 が娘は廬をその墓の側に結び日夜その追善をして一生を送りましたから見る
 人々が感心して皆涙を流したといひます

○松下禪尼の勤儉

勤は女子の職にて儉約は富の基るであります北條相摸守時頼の母は松下禪尼
 といひ従順にして言葉少く伶俐の評判が高うございましたある時禪尼酒宴を
 設けて時頼をはじめ臣下の者共を饗應することがありまして禪尼自分から障子の
 破れを繕つて居られました當日の相伴役秋田城之介義景かこれを見て大に驚
 き「高貴の御身にて御手づから成さらずとも幸ひかゝる業に器用の男があり
 ますゆゑその者に申し付けませう」といひますと禪尼は頭を掉り「いや〜
 それに及ばず其男は妾が細工には叶ふまい」と一小間毎に切り取り丁寧繕

つて居ました義景見かねて「悉く貼り替
 へた方が遙かに容易くその上外見も宜し
 うございます」といひますと禪尼は義景
 を顧みて「左様な心得にては物事に大な
 る誤りを仕出すものである總じて物事は
 何に寄らず其破れた所を修繕して置けば
 早く事が足りて費用も省け双方よろしき
 ものである、けれども若き人々のならひ
 として小繕ひを嫌ひ大業なる事をして却
 て用辨を缺くことが多いものである今日
 この尼がかゝる業をして居るのは時頼はじめ年若き人々に聊か心添へせん爲



この尼がかゝる業をして居るのは時頼はじめ年若き人々に聊か心添へせん爲

めであるといひましたから義景も感入つて退出したといひます

○静の貞節

心和らかにして操を守り行ひ正しく起居振舞ひの静かなのを婦徳といひます源義經の妾静はもと京都にて名高き舞妓でありにましたが天性柔和にして容貌人に優れて居ましたから義経も深くこれを鍾愛いたしました文治の二年義経は兄の頼朝と不和を生じ十郎藏人行家と謀り兵を擧げて頼朝を討たうといひし海路にて大物の浦に至りましたが暴風に遇ひ行家と別れ



くに成て吉野山に匿て居ました頼朝嚴重に之れを搜索いたしましたが居所が分りませんそこで義経の愛妾静を捕へて鎌倉へ呼び下し義経の處在を訊問いたしました、けれども静は更に存じませぬと云ふ計りでその處在を告げませんでした頼朝ある日静が舞ひの上手であると聞き鶴が岡の祠前にて舞を奏せよと命じました静再三辭退しましたが聞き入れませんから是非なく起て舞ひました頼朝心の中にて場所といひ時といひ必らず祝ひの歌を奏でるであらうと思つて居ましたやがて静は起ち上つて「志づや志づしづのをたまきくり返し昔を今になすよしもかあ」と謡ひ又一吉野山峯のしら雪ふみ分けて入にし人のあとそ戀しき」と奏でましたから頼朝大に怒り「今日の事當代を祝ふべき筈である然るに叛逆人を慕ふとは甚た以て不吉である」と既に罪科にも處せらるゝ所でありましたが夫人政子の計ひにてその罪を免れました

○上毛野の形名が妻の智畧

上毛野形名の夫人は姓氏が判然わかりませんが舒明天皇の御代に東の國の蝦夷がそむいて貢物をたてまつりませんから天皇上毛野形名を將軍としてうたせられました賊ともかくと聞いて城を固めて待ちかまへて居ましたから形名も向ふへ城を築いてせめ戦ひました、けれども賊とも力強くして形名は戦やぶれ寨に逃げ入りましたから賊ともは追ひかけ来て城を圍みました形名は詮方なく夜にまぎれ垣を越へて走らうといたしました形名の夫人は心をしく智謀がありまして夫に従つて戦陣にありましたが今この有様を見て嘆きて夫に向ひ一わが夫の御祖先は遠く青海原をわたり三韓を討ち平けて武名を後の世まで傳へられました、然るに今夫君がお逃げ成さつたなら先祖の威名をれとし必らず世間の人に笑はれませう一と諫めはけまし強て形名に酒を飲ませ

自分で夫の劔をはきあまたの女に命じて十張の弓の弦を鳴らさせましたから蝦夷等はまた残兵が多いと思つて引き退きましたそこで形名も兵器をとりて打て出で大に蝦夷をやぶり悉くこれを擒にいたしました

○虎女の眞情

虎女は相模の國大磯の里の遊女であります性質溫柔にて容貌も人に勝れて艶はしくまた歌道にも達して居ましたある日曾我十郎祐成と夫婦の約束をいたしました虎女は祐成が貧しくして其体甚だ見苦しうございましたから常に之れを憂ひ悲んで居ました或る日祐成が大磯へ往き軒端にたゞんで居ますと折ふし頼朝の召に應じて近國の武士どもあまた行列を成して通りました虎女は五六人の遊女達と物語をして「只今の先陣は横山東馬殿といふ事ですが誠に古き言葉に耳は樂を聞時は謹み心は奢時は恣にすべからずといつてありま

す思ふて甲斐なき事ですが此の人々の馬鞍鎧太刀を妾に呉れたならば何れ程
 嬉しき事でありませう」と云ましたから遊女どもは聞いて「わからぬ願ひ事
 ですそれを何にする都盛です」と笑ひました、すると虎女は「祐成殿へ差し
 上げたいからです」と言ひ捨て涙を浮かめました祐成はこれを聞きかほは眞
 情深き者を疑つて立聞きしたは我れながら耻かしいときあらぬ体にて内に立
 入りむつまじく語りひました其後建久二年鎌倉殿富士の御狩の時首尾よく曾
 我兄弟は親の敵工藤祐経を討取りましたその時虎女は年僅か十九でありまし
 たが祐成の討死したことを聞き絶へ入るばかりに悲み歎き遂に尼となりそれ
 より曾我の古郷へゆき兄弟の母に對面し箱根に登りて佛事をいとなみ販ると
 きに兄弟の討れて遺骸を埋づめた所を見ますと草が芒々と生茂つて居ますか
 らますく悲しく涙を流して

露どのみさねにし跡を來て見れば

尾花がすゑにあき風ぞ吹く

と詠み大磯へ立歸り高來寺の山の奥に菴を結んで一生を終つたといひます虎
 女の如きは遊女ではありませんけれど夫と頼んだ祐成の菩提を吊つて尼とさ
 り潔よく一生を終りましたは泥中の蓮といふべきものでありませう

○楠正行の母の教訓

楠正行の妻は藤原房卿の妹にて夫に似て方畧貞操たぐひ稀ある婦人であり
 ます建武三年五月賊將足利尊氏自ら西國の兵士數十萬騎を率ひて京都へ攻め
 登りました時新田左中將は之れを兵庫に拒ぎ止めましたそこで天皇は正成に
 仰せて兵庫に往き義貞を援くべしと勅があつた正成はその時必勝の策を建て
 奏聞に及んたる佞臣共の爲めに妨げられて御採用になりませんから正成は是

非あく討死と覺悟して湊川へ赴きました
 その時正行は十一歳でありました
 正成は之れを連れて櫻井の驛に往き懇ろに誠
 めて「われ聞く獅子の親は子を産むと三
 日にして千仞の壑中に蹴落して其力を試
 みるといふことである今其方は十歳に過
 ぎて居る心あらば我が言ふ事を覺えて居
 よ此度の戦ひ實に天下安危の分れる所
 あるゆゑ我は再び其方を見ぬであらう我
 が討死した後は天下は尊氏の有となる其
 時に成つて其方は苟且にも一身の安全を計りわが家を保たんため我が多年の



我が家を保たんため我が多年の

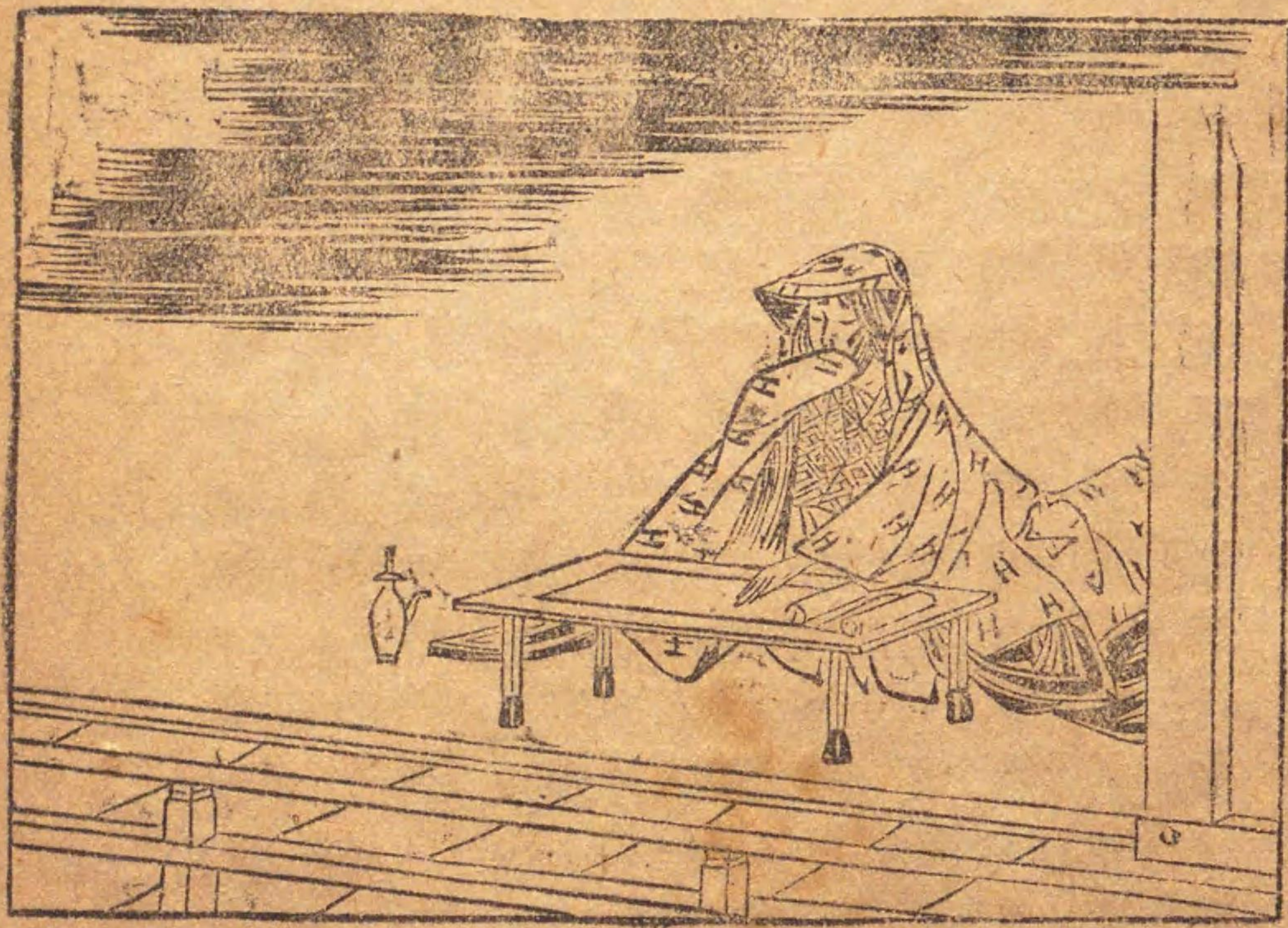
忠烈を思へば朝敵に降参して卑怯未練の働きをなし人々に笑はれては成らぬ
 ぞ一族郎黨の者一人たりとも生き残つて居る限りは金剛山の城にたて籠り再
 び義兵を挙げよ其方が我が報ゆる孝行はこれが第一であるぞ」と教へ諭して
 河内へ送り返しました正成は果して湊川の戦に討死いたしましたから尊氏は
 敵ながらもその忠節に感じ首を河内に送りその善堤を吊らへと言つて來まし
 た正行は父の首級を見て悲しき遣る方なく直に別室に走り入りましたから母
 は怪んで其様子を窺つて見ますと父のかたみに止め置いた菊一文字の刀を抜
 きアワヤ自殺せんとして居ます母は驚き走入り正行の小腕にとりつき涙
 を流して「其方は幼くとも正成の子ならばかばかりの理に迷ふてはなりませぬ
 を能く／＼事の理を考へて見よ父上の其方を櫻井驛より返されたは其方が幼
 くして共に死ぬのを不慙と思召しての事でもなく又其方に亡きあとを吊さう

どの事でもなく君のおはしまさん限りは残黨を集めて再び勤王の兵を起せといふ事である其方はまのあたり御遺言を承つて販り筒様くと妾に告げたではないか其の言葉はまたこの耳に残つて居る夫れを其方は忽ち忘れて仕舞つたのか左様の不甲斐なき量見にては逆も君の御用に立つことは覺束ない」と誠めてその刀を奪ひ取りましたかゝ正行は母の言葉に感じ夫よりひたすら朝敵を討滅ほさんと心掛け遊び事にも首を斬る眞似をして尊氏の首を斬るのたといひ又ほかの小兒等を追ひかけて敵兵を追ふのであると言つて居ました母もまた甲斐々々しく一族郎黨を撫育いたしましたから士卒小者に至るまで心を協せ遂に正行は二十二歳にて義兵を挙げ朝敵を攻め靡け父の武略に劣らぬ再び名を天下に轟ろかし河内の四條繩手にて高の師直の兵を敗り終に弟止時と俱に爰にて討死いたしました正行が力を王室に致し上は宸襟を慰め奉り下

は父の志を継ぎ初めて忠孝の人となつたは是れ全く母の教誡に因るのです古語に忠臣は孝子の門より出づるとあります實にその通りでございす

紫式部の文藝

女子は生付きたよわく優しきものですからその言葉遣ひも起居振舞ひも優しくしなれば眞に醜きものゆゑ能く心をつけぬは成りません紫式部は藤原爲孝の女にて藤原宣孝の妻でありますが幼き時より伶俐にて人の書物を読むのを聞けば



直に諳で記憶しました又よく歌を讀み博く和漢の書に涉りその上朝廷の儀式故事にまで通じたと申します式部或る時石山寺に參籠して源氏物語五十四帖を著述いたしましたが言葉のみやびやかたして文章の巧みなることは古今たゞめしなく後世文章を綴るものは皆これを摸範といたします天皇これを御覽して痛く御賞美にあり一式部は善く日本記を讀んだものであろう左なくは斯くは書き得られまい」と仰せられましたから是れより人々が式部をば日本記の局と呼びました斯様に才智學問人に勝れて居ました、けれども從順にして自分の才能に矜らず謹み深くして身持正しうございましたから後世に至るまで婦女の鑑といたします

千代女の専心

ちよは加賀の國松任の人ですが幼き頃より風流の志があつて俳諧を好みまし

たがこの邊に師匠とすべきものがありませんか、彼れか是れかと行脚の人に尋ねますと皆美濃の盧元坊といふが此の道に堪能たと答へますから行つて學ぼうと思つて居ますと折しも元坊が行脚をして來ましたから直ぐその旅宿に往つて面會を求め自分の志願を述べましたその時盧元坊はくたびれたと言て寢て居ましたがちよの言葉を聞きて「左らは一、句、詠、で、覽」と言ひました折しも初夏の頃でしたから時鳥を題といたしましたちよは取あへず一、句、詠、み、ますと盧元坊その氣韻のみみくならぬを見てわざと「是は誰れにも詠める句です」と言つてその句を取上げませんから夫れならばと又一、句、を、詠、み、ま、した、が最初の如く矢張取上げませんその中坊は眠つて仕舞ひました、けれども千代は猶ほその場を去らば深く考へ乍ら覺の眼めたのを伺ひて又一、句、を、問、ひ、斯くすること數句に及び遂に夜明に至りましたその時坊起き上りて「終夜去らば

して居られたか夜は早や明けましたか」と驚く時千代は

ほととぎす、ほととぎすとして明けにけり

と口吟みましたから坊は大に賞め一俳句の妙は是處な是處な御他日此の心を忘れさへせねは天下に名を顯はすであらう」とやがて師弟の約を結びました果して千代は女流に珍らしき此の道の名人となりました

奥村永福の妻

奥村永福の妻は世に名高き勇婦であります天正十一年加賀の國金澤の城主前田利家能登の國末森に城を築き士大將奥村永福に守らせましたところ佐々成政が八千有餘の軍勢にて之れを圍み別手を以て後巻を押へ一刻攻にいたしました時に永福の兵僅かに五百餘人爰を詮度と防ぎましたけれども餘り強く攻め立てられましたから永福「今は是れまでありいざ自害いたさむ」と言ひます

のを妻が聞いて「マジ暫らくお待ち遊ばせ」と止め自ら甲斐なくしく小袖の裾を高く褰け白綾の腹巻をしめ刀を腰に帯び青貝の眉尖刀を突き粥を手桶に入れて人に荷はせ防戦の兵士に自ら汲み與へ「昔楠とやら云ひし大將は日本全國を敵に引き受けて小城に立て籠りしと聞く是れ計りの敵何程の事があらう明日は必ず金澤の後詰が来るゆゑ唯今夜一夜のことである力の限り防ぎたまへ」と言て打ち巡りましたから永福も之れに勵まされ妻の振舞男子にも優る吾いかで女に劣るべきと勇氣を振ひ夜の明るるまできつと持ちこたへました、すると果して金澤の援兵が來ましたから竟に城を全ふすることを得たといひます

瀧鶴臺の妻

人は姿容の美しきより心の美しいのを貴ぶものであります夫れゆゑ男も女も

能く身を修めて心を美しくするやうに心懸けねはなりません長門の國萩藩の儒者に瀧鶴臺といふ人ありましたが學識高く品行正しく至極世間の評判が宜しうございました。すると同藩の士某の家に一人の娘がおりました。が將來顔貌醜くして宛ながら夜叉の如くでありました。から齡二十を超えてもまた定まる縁がありません。されば父母も深く心配して娶らうとさへ云ふ者があれば如何なる身分賤しき男にでも遣らうと云つて居ります。と娘は中々の夫えらみにて「尋常の人には嫁入いたしません。鶴臺先生のやうあんからは遣つて下さいまし」と常に申して居ました。鶴臺不圖この事を聞いて「左様な女子ならば必らず善く内を治めるであらう」とやがて人に媒させて貰ひ受けました。が果して何事も優しく柔順にて夫の心に逆つたことがありません。ある時物を取り片附けるとして坐敷の内を立ち廻つて居ました。が袂の内から赤き絲の圓く巻い

たのを取落しました。鶴臺之れを見て不審に思ひ「これは何にする物か」と問ひました。妻は愧づかしき様子にて「妾生れつきおろかにて日々の行狀を見ますと多く後悔することがございます。かゝ其過を少く致さうと思ひ御覽の通り赤き絲玉と外に白き絲玉とを作り平生片方づゝ兩の袂に藏め置き若し悪き念が萌しますと赤き絲を巻き善き念が起ります。と白き絲を巻き二三年の間斯様に致し居ります。中赤き方は大きくなり白き方は本のまゝでありました。からわが心で心を戒め一層慎んで居ましたが今日では兩方ともに同じ大きさと成りました。是れと申すも良人がお教へ下さつたお蔭でございます。たゞ耻かしいことにはまた白き方が赤き方よりも大きくなりませぬ」と更に一の白き絲玉を袂から取り出して夫に示したといひます。が心の錦とはこの妻女のことでありませう。

瓜生保母

人の命は最も大切なものでありますけれども國のためとか君のためとか自分の盡さなければならぬ條理によりては棄てねばならぬものです瓜生保の母は最も條理を辨へた人でありました延元の頃新田義貞越前の國金崎の城に立て籠りました時瓜生保其の弟義鑑源琳等と杣山の城に據り脇屋義治を奉し里見時成を大將として義貞を援けに往きました路にて賊將高師泰と戦ひ敗軍して義鑑姪七郎時成と俱に討死いたしました源琳等は散り残つた兵卒を収めて漸く杣山に還りましたが城中の軍士の多く戦死いたしましたかゝ人々の歎の聲は街に満ち目も當られぬ有様です然るに獨保の母はかりは顔の色も常に異らな少しも悲む様子なく義治に見參して申しますには「妾の兒も達が力め戦ひません爲め軍に負け大將里見氏を討死いたさせました定めて其の子息は

心を傷めて居られませうされとも妾が二人の子も従つて死にましたから少しは申譯がございます妾が家の兒共達は本と若君の御爲に大義を起したことでゆる賊さへ平けは百千の子や姪を討たれましても固より悔ゆる所はございませんまた三人の子がおりますから再び旗擧げをする時期がございます夫れゆゑ妾は哀しく思はずして喜びます」と云つて酒を侷めて慰めましたから一同感激して勇み立つたと申します

さら女の孝行

父母の恩は最も深きものでありますから父母には誠の心を以て善く事ふべきものですその誠の心を以て事へるのを孝といひます安藝の國高宮郡下町屋村の農民三次郎と云ふ者の娘にきちと云ふ者がありました性が性來親孝行にて幼少の時から善く親に事へ秋の頃父が猪や鹿などの防ぎに夜番をいたしますと

淋しい山中の庵ですがいつも従つて行きました五六歳の時には山に行つては落栗を拾つて来て土中に埋め置き毎朝二つ三つづゝ堀り出し焼いて親に食はせました又十二三歳の頃には松茸山蕪を採り芹なづかを摘んでこれを賣りその代にて父親の用ゐる蒲團を買ひ求めたことがあります或る人が父三次郎にさちの孝行の有様を尋ねますと三次郎は自慢顔にて「私の娘さちは幼き時から人より餅や菓子などを貰ひますと私が田畑に出て居る時でも必らず持つて来て私に與へますから自分こそ食ふが宜いと申して強て與へますと涙ぐんで悲しがりますから詮方あるいつも私が食ひます實に斯様に孝行な娘を持ちましたは私の仕合です」と答へましたさちが孝行の事領主へ聞え寛政四年米五俵を賜はりましたその時さちは十七歳でした其の後寛政十年再び五俵を賜つたと申します

大婆の反省

人間は時の運によりて富める時も貧しき時もあるものですそれゆゑ貧しき身分から富める身分になりました時は以前の貧しきことを思ひ妄に驕ることなく能く貧しき人を恤むよう心懸けねば成りません徳川二代將軍秀忠の乳母を大婆と申しましたがこの人は毎月一兩度づゝ五六箇の大牛切に飯を入れ六尺仲間などいふ召仕に自分で抄子を執つて椀に盛り振舞ふことを何奇の慰みとして居りましたある時本多正信と云ふ人圖ら其場に來合せて大婆に向ひ「下仕の女中も多勢居りますに斯る賤しき業を何故御自身にて成されますぞ」と問ひますと大婆は抄子を止めて「此の間中から其方が驕の振舞あることを人々から傳へ聞きました、けれども虚言とはかり思つて居たところ唯今の一言にて眞實と思ひます其方は昔孫八郎と云つた時の事を忘れられたか自

分は本三河の生れにて賤しき者でありました。が將軍家に乳を上げてから斯る身分と成りました。三河に居ました時は五人七人位の客にさへ振舞ふことが心に任せませんでした。が今は數百人に振舞ふことも心の儘です。昔の事を思つて今に引くらべると涕がてほれる計り喜ばしうございます。から斯く致すのであります。と却つて正信を諭したと申しますが、大婆の如きは富みて貧しき時を忘れぬ人でありませぬ。

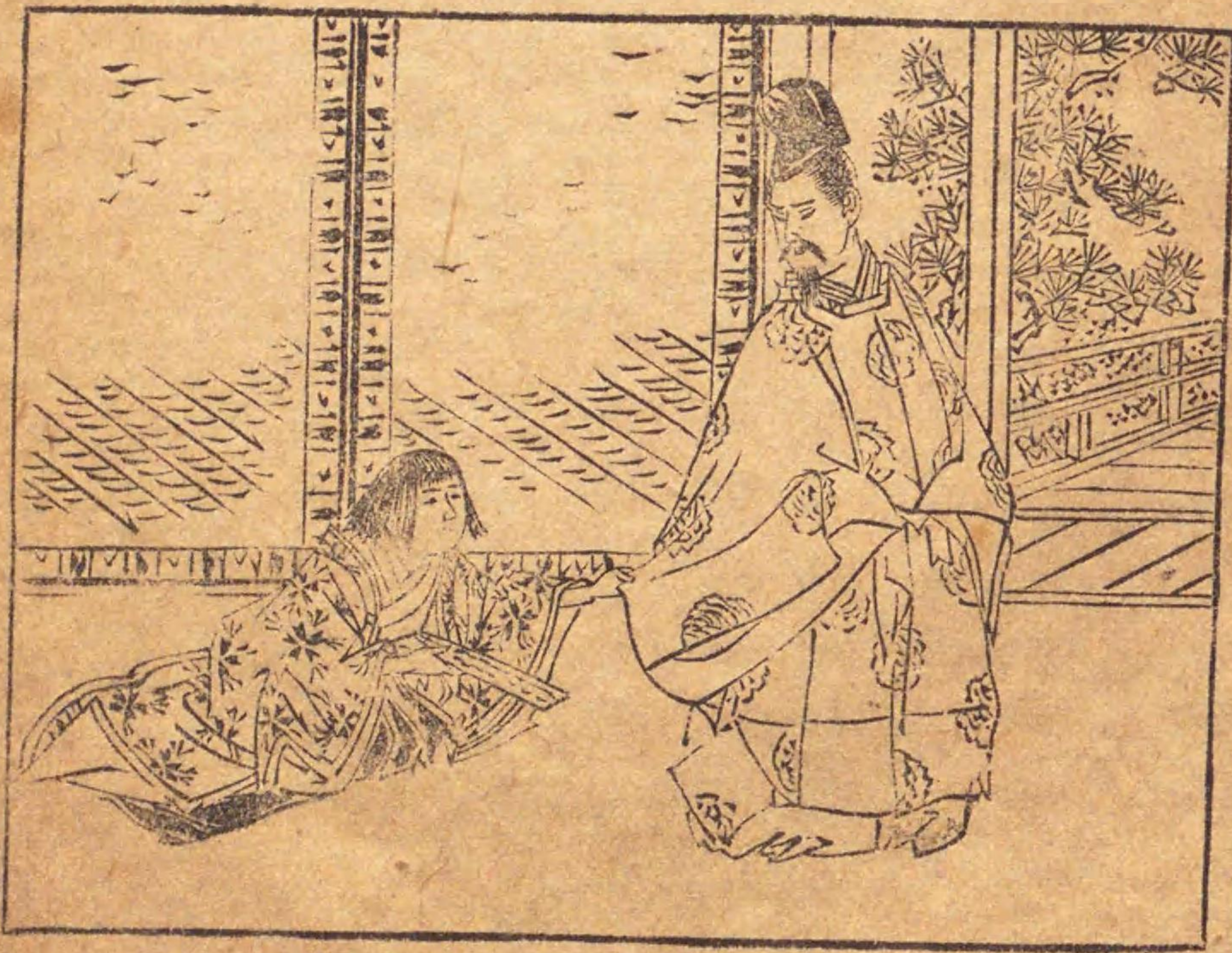
小式部内侍の詠歌

小式部内侍は一條天皇の御世に紫式部和泉式部あど中宮に仕へ皆名高き才女にて能く和歌を詠みました。小式部七歳の時その母丹波の國へ往きました。ゆゑ或る公卿が戯れに式部に向ひ「また丹波より便はありまんか」と問ひます。と小式部はその袖を執らへ「大江山ゆくのゝ道の遠ければまた文もみそ天

の橋立」と詠みました。からその公卿は大に驚き返歌もせず逃げて出したといひます。

せん女の恩恵

人を恵むは甚た善き行ひであります。けれども恵んで之れを恩にさせるは甚た宜しくありません。假令恩を施したとて決してこれを思ふものではござまいせぬ。下野の國那須郡にせんと云ふ婦人がありまして、たが常に貧しき人に金錢を與へ又は貸しなごして助けたことは幾人といふ數が知れぬ程でありました。然るに凶年打ち



凶年打ち

續きて活計が立ち難ねますから借入金返さぬ人が多人數ありましたせん女
斯と見てこの儘に打ち捨て置かばそれ〴〵の子孫の世に至つて互に不和の基
となると思ひましたから貸金の數を書き付け九扣帳を悉く焼き棄てました又
天明三年の饑饉には利足を省き金を貸して其の艱難を救ひ又年をろ貧しき者
の娘を我が家に養ひ置き成長の後人に嫁がせ又は馬を飼ひ置きて持たぬ人に
使はせざるなど善き事のみ行ひましから領主は其の志を稱美して天明の四年に
金子を下され其の上老を養ふ爲にとて絹物を着ることをも許されました當時
は下賤の者が絹物を着ることは政府より禁じられて居たのであります

渥美の貞婦

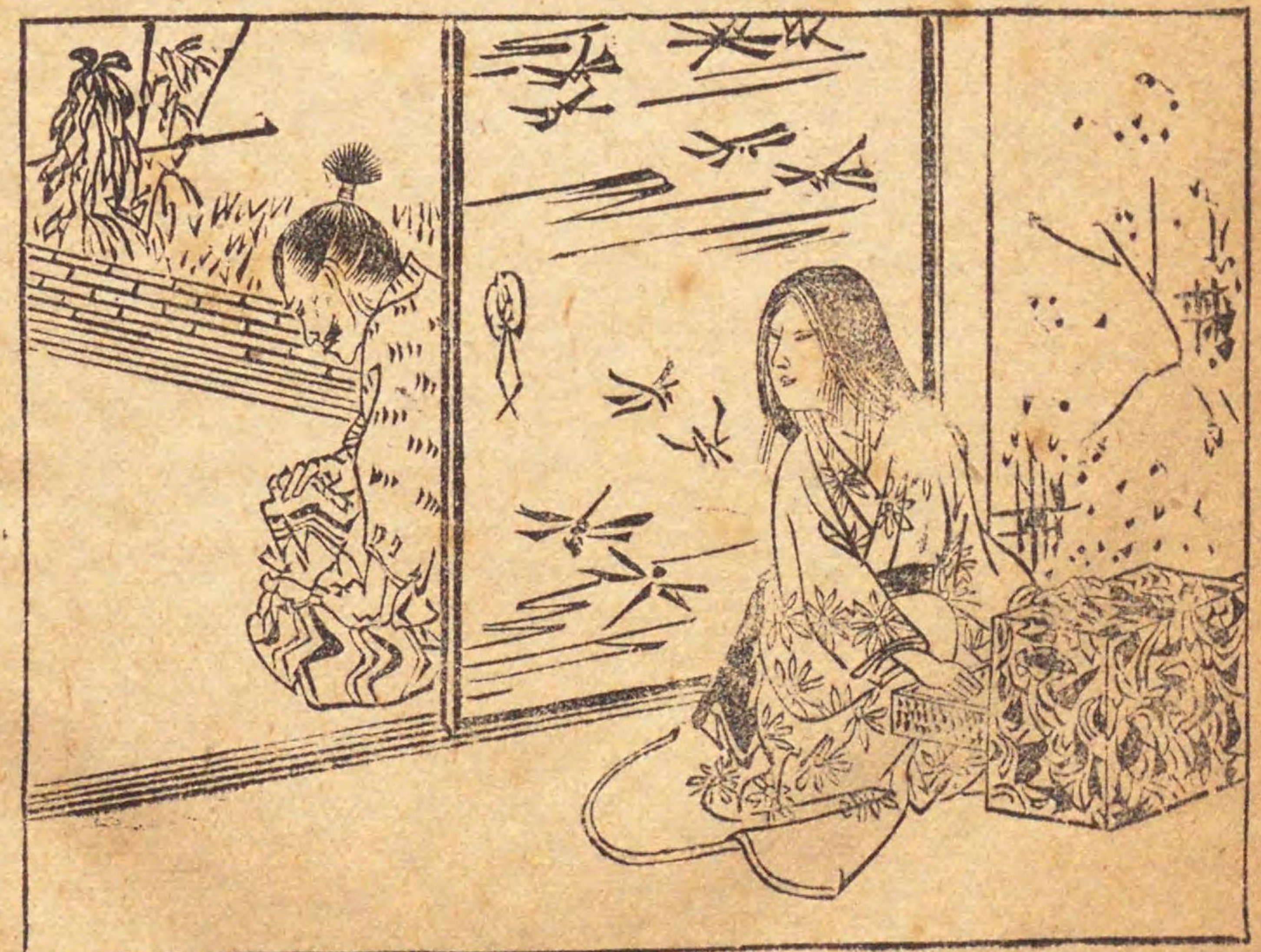
渥美の妻は永井氏の女でありましたが渥美へ嫁でから夫に仕へて禮儀正しく
夫婦の間睦まじうございましたその夫が死去してから後兄が再嫁を勧めまし

たけれども幼き子のある身だからと云て固く斷り一心に其の子を養育いたし
もとより出遊おなごの事は好まず夫を失ひし後は墓參の外は少しも外へ出
能く節を守り年四十に足らずして死亡しました當時の人々皆之れを貞婦と呼ん
で稱めたと姫鏡に出て居ります

山内一豊の妻

山内一豊は始め猪右衛門と稱へ織田信長に仕へた時家貧しくして名馬を買ふ
こと能はずは一豊嘆息して「今馬さへ良ければ出世の緒とも成るべく幸ひ良き
馬を賣りに來た者があれば購ふことも成らず悲しいことは貧の苦みである」
と云ひますのを其妻が聞いてその馬の價は何程と尋ねますと一豊は百金であ
ると答へました。すると妻は鏡台の底に秘め置いた黄金を取出して一豊に與
へましたから一豊は驚き怪んで「年頃貧苦に迫り御身と共に餓死をもせん程

であつたに御身は斯る金を所持すること
 を言はずあまりに心強し」といへば妻は
 答へて「仰つしやる所御道理でございま
 す、けれども妾が此の家に嫁ぎますとき
 父が妾を戒めてこの金子は夫が身に一大
 事の有た時差出せと云はれました貧苦は
 常の事ゆゑ今日まで秘め置きました良
 き馬さへ買へば出世の緒となるとあらは
 これこそ夫の大事と思ひましたゆゑ差し
 上げます」と云ひました一豊は大に悦び
 直にその金を以て良馬を買ひましたが一豊は此の時から追々立身して遂に



一國の主となりましたは此の妻の助けが多かつたゆゑであります誰れでも人
 の妻たる者は夫を大切にし常に夫の立身出世を助け家の榮えを願はなければ
 成りませぬ

修身女子教鑑

終

明治三十六年三月六日印刷
明治三十六年三月十二日發行



復製
不許

著作
兼
發行者

東京市日本橋區馬喰町二丁目十四番地
網島龜吉

印刷者

東京市神田區猿樂町二丁目二番地
上村龍之助

印刷所

東京市神田區猿樂町二丁目二番地
博信堂

發行所

東京市日本橋區馬喰町二丁目十四番地
嶋鮮堂

